

第4回 昭島市地域福祉活動計画策定委員会 会議要録

一 会議の日時及び場所

日時：平成26年7月17日（木） 午後6時30分～午後8時30分

場所：昭島市保健福祉センター4階 講習室・休養室

二 出席した委員（14人）

五十嵐和夫委員、石倉三雄委員、石田英一郎委員、大山弘一郎委員、奥村展子委員、帷子勝委員、久保美智子委員、高橋知子委員、常木浩史委員、橋本一政委員、福島忍委員、牧野奈緒美委員、皆川貞次郎委員、宮田次朗委員、

三 議事

1 委員長報告

「昨今の地域福祉に関する課題」

2 報告事項

・関係団体の聞き取り

3 協議事項

・市の地域課題

4 その他

委員長報告 「昨今の地域福祉に関する課題」

【委員長】

計画策定にあたって、課題の把握から、その解決に向けた施策の検討は最も重要な部分なので、十分に時間をかけて議論したい。本日は、冒頭、私から、最近の地域福祉の概況について説明し、その後、前回に引き続き、市の地域課題について議論していただきたい。

資料に沿って説明する。地域福祉といっても幅が広い。順位をつけられるものではないが、地域生活における課題として9つあげた。

「住民の孤立化」

これが死につながると孤独死となる。現在、年間3万人の孤独死が発生しているといわれている。その内、高齢者が6割、若年層が4割である。孤立化ではひきこもりや子育て世代など若年層の孤立化が目立ってきている。高齢者の孤立化は万引きなど犯罪に結びつくことがある。特に女性。また、孤立化は虐待にも結びついている。

「認知症」

年間1万人の認知症の行方不明者が出ている。その内、130人が実際に見つかっていない。昭島市では不明者情報がメール配信される仕組みがあると聞いている。

「買物弱者の問題」

主に高齢者で600万人を越えるといわれている。原因は、大型店舗の撤退などお店がなくなることと過疎化などでバス路線がなくなって買物に行けなくなることがある。交通手段の確保としては色々工夫してコミュニティバスの運行を行っているところもある。

「子育て支援の不足」

周知の事だが保育園、学童保育の不足が慢性化している。都は土地も確保しづらいなどの理由で特例をつけて改善を図っているが、解決できていない。

「障害者の社会参加、居場所づくり」

なかなか行き場所がない。高齢者も障害者もサービスを受けるだけでなく機会をつくれば出来る事もたくさんある。障害にも種類が色々あるが、一人ひとりの個性が伸ばせるようなシステムが重要だ。

「異文化を持つ外国人との共生」

昭島にも外国人が多くいる。ごみ出しなどの日常のルールが、うまく伝わらないことによりトラブルとなるケースもある。

「低所得者支援」

生活保護やそれに至る前の支援など、国を中心に行われているが、大きな課題は子どもの教育の格差につながっていることである。自分の勤める大学では、半数近くの学生が何らかの奨学金制度を利用している。

「個人情報保護と情報共有のあり方」

個人情報保護は大切だが、災害時などの情報共有の問題は、どのように納得してもらい共有していくか、重要な課題である。

「防災、減災の対応」

防災は全国的な課題なので、この辺りを地域福祉のテーマに進めていくことも一つの方法である。社協も災害時には災害ボランティアセンターの運営を担うことになっているので、情報発信していく良いテーマだと思う。

次に、対応策について説明する。

「子育て支援」

余裕のある高齢者の活用が考えられる。国からは子育て支援員の創設という案が出ている。

「小地域福祉活動の活性化」

豊島区の例をお示しする。(別紙資料：表1)

「高齢者同士の支え合いとコミュニティソーシャルワーカー（CSW）の創設」

CSW を配置することにより高齢者同士の支え合いを活性化させている地域もある。校区社協を立ち上げてCSW を配置している社協もあり、昭島でも選択肢としてありかなと思う。

「困りごとちょこっとお助けサービス」

昭島ではまだ実施されていないようだが、需要は多い。

「民間業者等との連携」

新聞配達、牛乳配達、郵便配達などの民間業者を巻き込んだ見守り体制が有効である。

「災害対策」

災害時要援護者対策はほとんどの自治体で行っている。

「社協のPR」

前回も言ったがキャラクターなどがあるといい。

『介護保険制度改正の概要』

資料のとおり

報告事項 関係団体の聞き取り

【事務局】

平成26年6月6日から7月11日までの間、7つの団体で実施した。

「昭島市青年会議所」

地域福祉については会の活動として取り組むべき重要な課題だと認識しているが、

青年会議所としてすぐに協力できる部分は災害対策とのことであった。今までどおり災害ボランティアセンターの立ち上げ訓練などに協力していく。

「民生委員・児童委員協議会」

サロン活動の立ち上げに関わる様々な苦労話をお聞きした。また、既存の地域組織とは別に、ボランティアや地域福祉に意欲がある方々を中心とした新たな組織づくりなどの提言をいただいた。

「昭島市障害者（児）福祉ネットワーク」

障害者を理解してもらうために社会参加や地域参加の機会が必要である。市民への研修を継続的に実施して欲しいとのことである。また、障害者で、高齢者で、かつ一人暮らしなどというケースがあり、ひとつの機関では解決しきれない事例が増えている。総合的に対応できる体制の必要性を感じている。

「子育てグループネットワーク」

自らの子育て経験から地域との関わり合いや災害対策などの話をお聞きした。また、既存の地域団体に馴染みにくい要因などを若い人達の立場から聞くことができた。

「地域包括支援センター」

介護保険法の改定が地域に及ぼす影響や地域包括ケアシステムに向けた課題などをお聞きした。その中で、高齢者だけでなく、家族をトータルに支援していく必要性に言及されていた。これは、障害者（児）福祉ネットワークでも指摘されており、福祉課題が一つの要因に基づくものではなくってきている事を改めて感じさせる話であった。

「地域福祉ネットワーク」

高齢者のネガティブなイメージを払拭したいとのことであった。核家族化の進展で子どもたちが高齢者に接する機会が少なくなっていることにより認知症などの高齢者の問題がなかなか理解されにくい現状で、いかに交流の場をつくるか、今回の計画づくりにも期待をしているとのことであった。

「自治会連合会」

ここ数年、防災について重点的に取り組み、災害対策のしくみがようやく整ってきたとのことであった。しかし、まだまだ地域力が足りないということで、今後は、青少年や高齢者など様々な分野と連携した地域力の向上に努めていく計画であるとのことであった。

協力いただいた団体の方々に感謝申し上げます。

【委員長】

何か意見等あるか。

【委員】

これからを担っていく子どもたちの声が重要。中高生の意見が聞けていない。

【委員長】

社協の福祉教育はどうなっているのか。

【事務局】

時間的に中高生へアプローチ出来なかったが、機会があれば聞いてみたいと考えている。福祉教育としては、ボランティアセンターに登録のあるボランティア団体の方々が、学校の要請に応じて車いすを使った授業や視覚障害者の方の話を書く授業などを行っている。

【委員】

7月22日と23日に市政60周年記念事業として子ども議会を開催する。22日が小学生、23日が中学生で、既に一般質問として子どもたちから質問事項が届いている。ごみ問題から防災、いじめなど幅広く興味関心を持っていることが伺える。

【委員】

そもそも若者が福祉に対して憧れをもつことはないと思う。だから我々が感じている福祉を教えるというよりも、どう肌で感じてもらうか、どう交流していくのかというような具体的な仕掛けが考えられれば良いと思っている。

【委員長】

報告の中で高齢者に対してネガティブなイメージを持つ子どもが多いということがあったが、今までの研究では、小さい時に高齢者と交流があるほど高齢者を好きになる傾向があると言われている。私もお年寄りが好きで高齢者福祉の道に入った。委員のいうように今は三世代の家庭が少ないので意図的に交流のきっかけをつくる必要があると思う。子育てと高齢者のサロンをたまには一緒にやるということなどもいいのではないか。中学生や高校生のようにある程度概念が出来てしまってからより、幼児や小学生のころに高齢者と交流があった方が、効果があるとも言われている。

協議事項 市の地域課題

【事務局】

前回までの会議で出された意見等を項目別に整理した。内容によって大きく9項目に分類した。

「価値観や環境の異なる人同士の交流の必要性」

新しく引っ越して来た人と従来から住んでいる人同士、あるいは、子どもから高齢者までの世代を越えた人同士の交流の場が少なく、意図的に集う場を設定する必要性が指摘された。また、障害者と地域の人との日頃からの交流についても、障害者の理解につながるものとして、その必要性が指摘されていた。

「集う場の確保」

交流の必要性は認められるが、実際に集う「場」の確保が大変難しいということであった。自治会の所有する会館の使用、あるいは地域福祉活動に特化した公共施設の優先的使用が出来ないか、との意見が多くあった。

「ボランティア活動の活性化」

認知症サポート研修など、意欲を持って講習に参加した方々が、その知識や技量を活用出来る活動の場がない、ということであった。また、ボランティア団体として登録している方々に地域福祉の分野でボランティアをお願い出来ないかというような意見もあった。地域に眠っている人材を掘り起こし、その方達にいかにか活躍していただくか、この計画に課せられている課題である。

「地域で民生・児童委員に協力するしくみづくり」

他の地区では福祉協力員というかたちで、民生委員の仕事の一部を手助けするしくみがあるようだが、個人情報等の関係で課題もあるとのことであった。

「小地域福祉活動のベースとなる組織づくり」

自治会やサロン活動団体、ウイズユースの活用などがあげられていた。また、既存の組織でなく地域福祉に対して意欲のある方々を中心にした新たな組織づくりも必要ではないかとの提言もあった。

「圏域の設定」

小中の学校区、自治会、地域包括支援センターの区域割りなどがあげられていた。しかし、顔の見える関係となると、徒歩で5分から10分程度の範囲ではないか、との意見もあった。

「災害対策」

災害に備えて日頃から顔の見える関係を築いておくことの重要性、また、医療との連携などがあげられた。

「情報の発信」

正確な情報を必要な人へ確実に届ける情報発信の必要性と社会福祉協議会のPR不足が複数の委員から指摘された。

「地域担当の必要性」

他地区の社会福祉協議会で実施されている地域福祉コーディネーターやコミュニティ・ソーシャル・ワーカーの導入の必要性に言及があった。

【委員長】

この資料や前回の議事録を参考に、引き続き「市の地域課題」について議論してもらいたい。本日は更に「その課題の解決に向けた取り組み」についても意見を伺えればと考えている。順次、発言願いたい。

【委員】

高齢者はネガティブだという話だが、老人会の総会などでは「老人会」という名称のことがよく話題にのぼる。色々調べてみたが、まだ東京では「老人クラブ」という名称が多数派である。いずれはネーミングから変えていくことも必要になってくるかも知れない。

しかし、今は高齢者といっても地域コミュニティの一員として、地域を支える一部として理解されている。およそ8割が健康で元気な人達である。この人達を地域の支えとしてどう活用していくか、どういうかたちで地域と交流していくか、もっと元気な我々を使ってもらいたいと思っている。年寄りの知恵と経験を地域に還元していきたい。

【委員】

交流の必要性ということで、新旧住民の交流、世代間の交流、障害者との交流があがっているが、何が阻害要因なのか、もう少し皆でコンセンサスをとって、一つずつ潰していければいいと思う。

それから、医療機関との連携ということが災害対策のところに出ているが、今、介護と医療の連携など様々な分野で医療との連携が問われている。しかし、なかなか難しい問題で、この計画の中で、そうした「場」の設定など、きっかけづくりが出来ないかと考えている。

【委員】

研修会や話し合いに参加すると、連携が大事だということがどこでも言われる。今回の計画の策定にあたっては、地域住民が多く所属している自治会連合会や老人クラブ連合会などとの連携が重要だと思っている。そこに、いかに地域福祉の情報を効果的に提供していけるか、計画の中に盛り込みたい。

【委員】

災害対策として中高生は、りっぱに役に立つ。大人でもない、子どもでもない世代の力をどうやって引き出して役立たせるか。中学校にはボランティア部もあり、子どもたちも何か社会に役立ちたいと思っている。これをつなげるしくみがあるとい

いのではないか。また、そうした仲間づくりのために集う場も必要だと思う。

【委員】

私達の団体も青少年事業として子どもたちを対象に色々な事業を行っている。世の中の事に興味を持ってもらうことが大切だと思っている。その切り口が環境であったりするが、今までは、なかなか福祉ということにつながらなかった。

交流の必要性の項目では、単に交流を目的とするのではなく、何かを目的に事業を行った結果として交流ができるようなやり方も一つの方法だと思う。

【委員】

障害者や高齢者、子育てを支援するうえで別々にやっていたは難しくなってきたというような指摘があった。私達の団体は、人が子育てをして高齢化していく、その過程の中で障害を持つこともあるし、様々な出来事がある、それらは一つ一つ人生の一場面だと捉えている。従ってトータルにつなげて考えていく社会が必要だと思う。しかし、現状では行政が縦割りなので、難しいと思うので、せめて地域の中では、障害者、子育て、高齢者のボランティアと区分けするのではなく、壁を越えて活動できるしくみをこの計画の中に盛り込みたい。まず、住民の意識を変えていくことが必要である。

それと人材育成。色々なものに関心を持って何らかの役割を果たしたいと思っている人はたくさんいるが、何をしたいかわからないという人も多くいる。地域福祉の基本は住民参加なのだから、この人達が目的を持って活躍できるしくみが必要だと思う。

【委員】

障害者は人数的に少ない。だから分かりにくい。だけど地域に必ずいる。先日、障害者権利条約の市民フォーラムを開催した時に、民生児童委員の方が20名も参加してくれた。まず知ってもらう。障害者福祉はここから始まるのだと思う。障害には色々種類があって精神障害や発達障害などは分かりにくい。以前、社協と一緒に知的障害者、発達障害者のボランティア講座を2年続けてやった。その中で、体験ボランティアをやってもらったが、そこで受講者は、障害者が出来る事がたくさんあるということを改めて知った。まず、障害者を知ることから始まるので、こうした市民を対象とした講座を継続的に開催してもらいた。私達も一緒にやっていく。

【委員】

子育て支援に関しては、もう解決策は分かっている。いかに行政が財源を投じて施策を実施するかということにつけるので、地域で考える課題ではないと思う。以前は、子育ては地域で支援するしくみができていたが、今は、子どもを預かった時の

責任問題などで昔のように出来なくなっている。社会がそうなっているのだから行政が解決するしか方法がない。それより私の中では、虐待や養困のレベルに至らないグレーの家庭にどう手を差し伸べていくかということが問題である。表面化してしまえば救済も出来るがグレーゾーンにいる子どもが一番つらい思いをしている。地域の見守りが必要である。

昭島市独自の課題があれば計画づくりも解りやすいのだろうが、全国どこでもだいたい同じようなものだと思う。しかし、せまい地域で見れば、それぞれ固有の課題がある。そこでコーディネート出来る人を育てる事が必要ではないか。今の若い人は組織に所属することを嫌がる。幼稚園の役員を決める時はジャンケンに負けた人が引き受けることになるが、餅つき大会には勝った人でないと参加できない。つまり、組織化して何かを行うのではなく、おこなった後に必要であれば組織化するという手法が必要である。そのためには戦略を立てるコーディネーターが重要となってくる。地域には、高齢者や障害者、子育てしている人など様々な人が暮らしている。何か問題が生じた時に、そこをコーディネートできる人を地域の中に育てておいて、その人が状況に応じて専門家につないでいけるしくみがあるといいのではないか。

【委員】

行政の仕事をしていて20代の若者にアプローチするのが非常に難しいと感じている。子ども議会の質問の内容などを見ると、市域の課題に目を向けている子どももいるが総じて若者の地域課題に対する関心は低い。

引きこもりやニートの相談も多い。対応は専門性が高く難しいが、こういう若者が自立出来た場合は、サポートする側になることが出来る。若者に福祉に関心を持ってもらうことは、なかなか難しいので、若者同士のつながりの中で福祉に目を向けてもらうことも一つの方法だと思う。

【委員】

色々課題が上がっているが、何か核になるものを定めて計画をつくった方が住民にとっては分かりやすい、参画しやすいということになるのでは。その意味では、世代を問わず関心が高いのが防災ではないか。わが身を守るためには地域がしっかりしていなければいけないということをみんなに訴えられると思う。

【委員】

昭島民児協では、今年は70歳以上の高齢者世帯を民生委員で全部回ることとした。うわべだけでなく、一人ひとり現場に入って、自分の担当地区にはどんな人が

いて、どんなことに困っているのかを把握しようということで始めたものである。高齢者の孤立化が言われているが、それだけで不幸だと断定出来るものではない。配偶者の介護でむしろ二人暮らしの高齢世帯の方が問題を抱えている場合もある。だから、問題を一面や言葉だけで考えるのではなく、本質をどう捉えるかが重要だと、日々現場を歩きながら感じている。

高齢者のくくりの中にはニーズとシーズが同居している。支援される人がいる一方で健康で支援できる人もたくさんいる。話を聞いてもらうだけで一日、気分良く暮らすことが出来るという人もいる。要は、その人にとって、どういくことがあれば人生の一場面で幸せを感じられるかということをよく把握しないと、ここでつくる計画がうわべだけのものになってしまうのではないかと危惧している。

【委員】

自治会が福祉の受け皿にならないといけないと感じている。これからじっくりやっていきたい。自治会はここ4年間、防災に取り組んできた。避難所運営委員会を予定しているが、皆さんにもメンバーになっていただき、連携を取っていきたい。

しくみをつくるという趣旨で昭島市と「地域力向上委員会」を立ち上げ、8月からスタートすることになった。最初は自治会の加入率アップ、その後、地域コミュニティの活性化と地域力の向上ということをやって、年度末には一つの目途を立てたいと思っている。

自治会のエリアが皆さんの地域割りと違う。自治会では、中学校区を一つのエリアとして考え、既に動き出している。多くの団体がエリアを合わせていただくと、話し合いの場が出来ると思う。今後はエリア別の懇談会を予定している。

5月に自治連の総会を行ったが、平成26年度の活動方針、事業計画で「地域福祉事業への参加」を明確にうたった。ここにいる委員との関連では、「老人クラブの未結成地域をなくしていく活動への協力」、「社協主催の各種委員会への参画と事業への参加」、「民生委員・児童委員への相互協力」、「地域包括支援センターとの連携」を明記した。しかし、福祉に関しては、すぐに取り組む態勢がまだ来ていないので4、5年先になると思う。今回、この活動計画が出来たら、それに添って準備をしたい。

【委員】

ボランティア活動しているが、他のボランティアとの横のつながりが無い。何をしているかわからない。PR不足とボランティアセンターの場所の問題だと思うが、もう少し、つながりが出来たらいいと感じている。

自治会の役員をやっているが、課題にあげられている「ちょこっとサービス」を自分の所ではやっている。市域全体で組織化出来ればいいなと思っている。

この間、四国へお遍路に行ってきた。町や市、県全体が迎えてくれているという感じを受けた。昭島にも「おもてなし」の心が生まれればいいと思う。

【委員長】

ご意見、ありがとうございました。

この間、授業で消防団を取り上げた。昭島の状況はどうなっているのか。

【事務局】

現在、四個分団で定員が90名である。

【委員長】

縮小傾向にあるか。

【事務局】

もともと、この形である。3、4年前に84名の定員を、女性消防団員を入れたりして90名にした。

【委員長】

いかに若年層を地域福祉の輪に入れるかということで消防団を取り上げたのだが、全国的には減少傾向にある。女性消防団は逆に増加傾向にある。授業を終えてレポートを書かせたところ、消防団に入りたいという生徒が70～80人中2名いた。20～30人は興味を持ったようである。今、学生消防団というものもある。消防団は消防だけでなく普段はお祭りの警備など地域とのつながりも深いので、若者を取り込む一つの流れにもなっている。

共通のテーマとして、どんな人にも関心がある「災害対策」という意見をいただいたが、社協は災害時に災害ボランティアセンターを運営することになっているので、訓練などをきっかけにして何か取り組んでいけるといいのではないかと思う。

コミュニティ・ソーシャル・ワーカーの話も出たが、何でも話が出来たり、相談できる人を身近な地域に置いておくことは良い方法だと思う。

事務局から何かあるか。

【事務局】

貴重なご意見をいただいた。今後、今までの議論を踏まえ計画をまとめていくが、再度ご意見を伺うこともあるかもしれないので、その際にご協力をお願いしたい。

【委員長】

委員から他にあるか。

【委員】

10年ぐらい前、社協で「地域マネー」の勉強会をやった。これからは有償ボランティアを主体に考えていかなければならないと思っている。高齢者は支えられる人と支える人がいるので、元気で支える事の出来る時に貯金をしておくということを考えてもいいのではないかと思う。ちょっと調べておいてもらいたい。

【事務局】

現在、社協では、くじらほっとサービスとファミリーサポート事業が協力会員の有償ボランティアを基本として実施している。

【委員長】

最後に言い残したことはありませんか。

【委員】

計画が出来た時に、誰がやるのか。社協で何かやると言っても20～30人集まったぐらいでは、昭島市民11万3千人のほんの一部でしかない。計画を実行する人を育てる人材育成の項目は、是非とも必要である。

【委員長】

社協では、今までサロン活動などの人材育成をどうしてきたのか。

【事務局】

サロンを実践している人に講演をしてもらった。現在25団体が立ちあがっているが、そうした研修の効果だと思う。

【委員長】

まとめた計画案は、事前に皆さんにお送りする予定である。

次回の策定委員会の日程だが、10月23日（木）に第5回策定委員会を開催したい。

【委員長】

以上で第4回昭島市地域福祉活動計画策定委員会を終了します。ありがとうございました。

